

コロナ禍の中、ASKは「アーティストファースト」で支援しています。

2020年度助成活動報告

寺田千代乃上方落語若手噺家支援寄金助成

第6回上方落語若手噺家グランプリ2020

アーツサポート関西は、2015年より、「寺田千代乃 上方落語若手噺家支援寄金」として設けられた500万円のファンドから、天満天神繁昌亭で開催される「上方落語若手噺家グランプリ」に対し毎年50万円を助成しています。このグランプリは、(公財)上方落語協会の主催により上方落語の若手噺家を対象に設けられたもので、決勝戦のチケットはいつも販売とほぼ同時に完売状態。繁昌亭の中でも屈指の人気を誇ります。若手の登竜門として、長い伝統を持つ他の賞と肩をならべる形で定着し、上方の若い噺家たちの大きな目標となっています。

2020年はその第6回目にあたります。グランプリは毎年、4月に4回の予選と6月に決勝戦を行いますが、2020年は新型コロナの影響により、開催自体が危ぶまれる中、12月に予選の時期をずらし、2021年2月にグランプリ決勝戦を行いました。12月に行われた予選には、参加資格を持つ36人の若手噺家がエントリー。9名ずつが4回の予選に分かれて出場し、予選上位2名と予選4回で最高点の第3位1名が決勝戦に出場しました。

決勝戦には予選を勝ち抜いた笑福亭べ瓶さん、桂文五郎さん、桂華紋さん、笑福亭笑利さん、露の紫さん、桂九ノ一さん、林家染八さん、桂三四郎さん、桂三実さんの9名



上方落語協会の笑福亭仁智会長(右)より賞状を受け取る桂三四郎さん(左)

が出場。いずれも練り上げられた渾身のネタで会場を爆笑の渦に巻き込みました。審査の結果、第1回目から6回連続で決勝戦を戦ってきた桂三四郎さんが、那須与一の古典的な噺を絶妙にアレンジした創作落語「扇的」で見事グランプリを射止めました。三四郎さんは、数年前から拠点を東京に移すも、このグランプリに強い意欲で挑み続け、その熱い想いが伝わってくる圧巻の落語でした。準優勝は同じ桂文枝一門の桂三実さんとなり、同門でのワン・ツー・フィニッシュを飾りました。

企画協力

北御堂花まつりコンサート

新型コロナの影響により発表の場を失った関西の若い芸術家たちを支援しようと、大阪ロータリークラブ社会奉仕委員会の呼びかけで、2021年4月8日、大阪御堂筋にある本願寺津村別院「北御堂」の本堂にて、関西の若手弦楽器奏者を集めた演奏会「スーパークラシックアンサンブル花まつりコンサート」が開催されました。この演奏会にアーツサポート関西(ASK)は、企画協力として関わりました。

演奏を行った「スーパークラシックアンサンブル」は、指揮者の佐渡裕さんが主宰する「スーパーキッズオーケストラ」のOG・OBを中心に、新たに結成された23名のアンサンブルで、メンバーはいずれも世界を目指す精鋭ぞろい。お釈迦様の誕生日である4月8日の花まつりにふさわしい、生命力に満ち溢れた世界水準の音楽が、コロナ禍の苦境でがんばるすべての人々へのエールとして本堂いっぱいに響きました。今回の企画の取りまとめ役となったコンサートマスターの堀江恵太さんは、昨年ASKの助成対象者として活躍され、本号の表紙でも堀江トリオの一員としてご登場いただいています。



北御堂本堂で演奏するスーパークラシックアンサンブルメンバー

聴衆には、北御堂の特別のはからいで、医療従事者の方々や、大阪市社会福祉協議会の協力により普段クラシックの演奏会に足を運べない障害のある方々など100名ほどが招待されました。バッハの「G線上のアリア」やモーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」などの良く知られた曲から、R.シュトラウスの「メタモルフォーゼン」といった生命の尊さをテーマとした曲などに、みなさん静かに聴き入っている姿がとても印象的でした。

カルティエ 心齋橋ブティック・コンサート

大阪心齋橋に5月に移転リニューアルオープンしたカルティエ 心齋橋ブティックにおいて、2021年7月31日、アーツサポート関西(ASK)の協力のもと、コンサートが開催されました。

このコンサートはコロナ禍の中、大阪の若いアーティストに発表の場を提供したいというカルティエの提案で実現したもので、昨年ASKが助成したヴァイオリニストの谷本沙綾さんと、チェリストの松蔭ひかりさんのお二人に登場いただきました。

谷本さんと松蔭さんは、相愛高校から2019年相愛大学に特別奨学生として進学した同期生で、2018年、相愛高校3年時に国内音楽コンクールの最高峰として知られる第72回全国学生音楽コンクールでヴァイオリンとチェロ

のそれぞれで第1位を獲得。同じ学校の同学年での同時1位はお二人が初めての快挙でした。

フランス人デザイナーの手による、色や素材など細部に至るまでこだわりぬいた美しい空間の中で、谷本さんと松蔭さんはカルティエのジュエリーを身に着け、透明感のある凛とした響きの見事なデュエットを披露し、集まった人々を魅了しました。

ASKでは今後ともアーティストの活動の場の拡大につながる支援を行っていきたくと考えています。



谷本沙綾さん(左)と松蔭ひかりさん(右)

2021年度助成活動報告

吉田 玉翔さん(文楽人形遣い)

伝統芸能
(一般助成)

「文楽夢想 継承伝」の開催

若手の技芸員たちに経験を積ませることを目的に、若手とベテランが通常の枠を超えた配役で演じる文楽初の試み「文楽夢想 継承伝」が、文楽人形遣いの吉田玉翔さんを中心とする文楽技芸員たちの手によって企画され、2021年8月7日、国立文楽劇場で開催されました。

この公演は、太夫および三味線で若手がその曲の中心となる「シ」をつとめ、先輩がサポート役のスノに回り、人形遣いでは、師匠と弟子、そして親と子の共演となるなど、通常では見られない配役で、まさに若手がベテランに挑む緊張感たどる舞台となりました。

途中、今年7月に人間国宝となった桐竹勘十郎さんとベテランの吉田玉男さんのお二人に関西・大阪21世紀協会の崎元利樹理事長が加わり、この取り組みの意義を語る場面もありました。

演目は、「二人三番叟」で、桐竹勘十郎さんと弟子の勘介さ

んがびったりと息のあった踊りを披露し、「傾城阿波の鳴門 順礼歌の段」では母と娘を実の親子である吉田一輔さんと養悠さんが親子の別れを情感たっぷりに描き、最後の「五条橋」では、吉田玉男さんが牛若丸を、弟子の玉路さんが弁慶を演じ、師弟の連携で五条橋での弁慶・牛若丸の激しい戦いの場を見事に演じ切りました。

この公演を企画した吉田玉翔さんは、今後ぜひこの取り組みを続けていき、若い技芸員たちの一つの目標としていきたいと語っていました。



桐竹勘十郎さん(右)と桐竹勘介さん(左)

HMPシアターカンパニー

舞台芸術
(一般助成)

「仮想劇場 夜、ナク、鳥」オンライン配信公演

演劇の可能性に真摯に向き合いながら、大阪の現代演劇界の推進役のような役割を果たしてきたHMPシアターカンパニー。新型コロナによって劇場での上演ができなくなった状況において、彼らはあらためて演劇と向き合い、オンライン会議システムを利用した独自の演劇形態を作り出し、2021年7月、故・大竹野正典作「夜、ナク、鳥」をオンライン配信によって上演しました。

上演はZoomを利用して行われ、それぞれ個室に分かれて演技をする俳優の動きをデジタル処理で統合させて、ひとつの演劇として見せる趣向です。人物は強いコントラストが効いたモノトーンのイメージで描き出されます。

ストーリーは、人の命を救うはずの看護師たちが、非道な悪巧みを意図する友人にそそのかされて、夫たちの保険金

殺人に手を染めていくというスリリングな内容。生と死、友情と裏切りというさまざまな対立軸が絡み合いながら進行し、思わずストーリーに引き込まれていきます。

劇団を主宰する演出家の笠井友仁さんは、演劇における観客の重要性を主張します。それが単なる演劇を記録した映像の配信ではない、リアルタイムで鑑賞される今回の上演方法につながりました。



「夜、ナク、鳥」の1シーン